astellas
Leading Light for Life

News Release

2010 年 5 月 31 日

「病気が教えてくれたこと」エッセイコンテスト 入賞作品　書籍化のお知らせ

ー当社ウェブサイト内に「こころの辞典」を開設し、一次審査通過 739 作品を紹介ー

アステラス製薬株式会社（本社：東京都、社長：野木森 雅郁、以下「アステラス製薬」）は、昨年実施した「病気が教えてくれたこと」をテーマとしたエッセイコンテストにつき、入賞 120 作品を掲載した書籍を株式会社文藝春秋出版部より本日発売しましたので、お知らせいたします。

「病気が教えてくれたこと」エッセイコンテストは、アンメットメディカルニーズを満たす新薬を届けることを通じ、世界中の患者さんの健康に貢献していく当社の企業姿勢をより広く理解いただくためのコミュニケーション活動の一環として、昨年 8 月から 9 月にかけて実施されました。最年少は 6 歳のお子様から最高齢は 92 歳の方まで、全国各地から作品が寄せられ、応募総数は事務局の予想を大幅に超える 11,970 通にのぼりました。応募作品には、応募者ご本人やご家族が、ご自身の病気について誰かに聴いてほしい、同じ境遇にある人に、あるいは社会に向けて何かを伝えたい、届けたい、という願いが込められていました。このこころの声、いのちの声を、病気と闘うひとりでも多くの方々のもとにお届けしたいと考え、この度、11,970 通の中から選ばれた入賞 120 作品をまとめ、書籍化しました。

当社は既に 1 月より、本日書籍化した入賞 120 作品を当社ウェブサイト（http://www.astellas.com/jp/）に掲載していますが、この 120 作品に加えて本日より一次審査を通過した 619 作品を追加掲載しました。この公開と併せて本書を発行することで、より多くの方々に当社ウェブサイトへアクセスいただき、ご応募いただいた方々の声を広く社会へ発信していきたいと考えています。なお、入賞 120 作品から選ばれた審査員賞 10 作品（別紙）についても、本日の当社ウェブサイトにおいて発表しています。また 6 月下旬からは、お気に入りの作品を選んで書籍のように出力できる「オリジナルエッセイ集」機能や、好きな作品をご家族や友人に送ることができる「グリーティングス」機能も追加していく予定です。

アステラス製薬は、今後も病気と闘うすべての人々と勇気・希望を共有するコミュニケーションスローガン「明日は変えられる。」を通じ、ブランドコミュニケーションを展開していきます。

【本リリースに関する報道関係の方のお問い合わせ先】
アステラス製薬株式会社　広報部
TEL：03-3244-3201　　FAX：03-5201-7473

【別紙】

各審査員賞

＜重松清賞＞
●「病は生きる強さ、痛みは生きている証、不安は優しさを教えてくれる。」
（けんだまさん　28 歳 男性 会社員・公務員/群馬県）
●「いつもそばに２人がいたこと。」（ボク、タカシさん　56 歳 男性 自営業/大阪府）

＜倍賞千恵子賞＞
●「人は、人にしか救えない。」
（大竹 佳美さん　37 歳 女性 専業主婦/京都府）
●「癌は、私の師匠。」（うわばみ姫さん　49 歳 女性 会社員・公務員/京都府　）

＜野村忠宏賞＞
●「おててって温かいね。」（坂田 実優さん　10 歳 学生/大阪府）
●「56 歳、現役女子大生です。」（青学の母さん　56 歳 女性 学生/神奈川県）

＜Chara 賞＞
●「笑いの絶えない病室。」
（熊手 祥子さん　45 歳 女性 専業主婦/東京都）
●「病気は、踏んづけたガムのようなもの。」
（松永 麻由実さん　31 歳 女性/大分県）

＜アステラス賞＞
●「病気は、人生の修行。」（せいちゃん大好きさん　41 歳　女性 専業主婦/愛知県）
●「神様からの贈り物。」（渡辺 麗子さん　47 歳 女性 その他/神奈川県）

新刊のご案内

＜タイトル＞

『病気が教えてくれたこと』

編集　アステラス製薬エッセイコンテスト事務局

写真　蜷川実花

発行　株式会社文藝春秋出版部

定価　1,575 円（税込）

ページ数　376 ページ

初版発行日　2010 年 5 月 31 日

ISBN コード　9784160080980

C コード　C0095

＊売上げの一部は、アステラス製薬の社員による社会貢献基金である「フライングスター基金」へ寄付する予定です。
＊「フライングスター基金」は、ささやかでも継続できる社会貢献活動を目的に、社員が中心となって 1996 年に発足した基金であり、人々の健康と福祉の向上に寄与することを活動目的としています。同基金への参加は社員の自由意思に委ねられており、加入者は毎月 100 円を基金に積み立て、マッチングギフトとして会社が同額を拠出したものを原資に年 1 回の寄付を実施しています。同基金では　（社）全国肢体不自由児・者父母の会連合会を通じて毎年数台の車いす送迎車を福祉施設に寄贈しています（昨年までの累計寄贈台数：153 台）。

【エッセイコンテスト審査員　重松清さんの総評】（書籍より）

大いなる矛盾。素晴らしい矛盾。

何度も圧倒されました。最初の一行から目と心がわしづかみにされてしまう作品がありました。まばたきすら惜しんで食い入るように読み進めた作品も、読み終えたあとの余韻にいつまでもひたっていたいと思う作品も、ほんとうにたくさんありました。「最初の読者」としての立場では、じつに幸せな時間でした。だからこそ、すべてのエッセイを読了したあとに「審査員」の立場に転じると、これほどツラい時間はありませんでした。

どれも素晴らしかった。文芸作品としての出来映えを問う以前に、お一人お一人の体験の重みは、そして病気という体験から得たものの尊さは、本来、決して競べることのできないものだとも思うのです。

病気でも怪我でも、痛みや苦しみというのは、物理的にはあくまでも自分一人のものです。それでも、そんな孤独な体験が、逆に「自分は一人ぼっちではない」ということを教えてくれる――。大いなる矛盾です。素晴らしい矛盾です。僕は、その矛盾こそが、人間だと思っているのです。

病気の自分を支えてくれたお医者さんや看護師さんがいる。さりげない一言で励ましてくれた友人がいる。痛みや苦しみを分かち合う家族は、全快したときに誰よりも喜んでくれるひとでもある。あるいは、健康のありがたさを病気になって噛みしめるというのは、昨日までの自分とのつながりを感じていることでもあるでしょう。また、「病気が治ったら、こんなことをしよう」「この体験を将来に活かそう」と思うのは、明日からの自分に思いをはせることでもあるはずです。

一人きりの痛みや苦しみが教えてくれた、さまざまなつながり――。
審査を終えたいま、「審査員」ではなく「同じ時代の同じ社会を生きる仲間の一人」として、一つ一つの作品をゆっくり読み返させていただこうと思います。

重松清（エッセイコンテスト審査員）